

悪役令嬢？いいや、その女はただの巨悪だ！

気力♪

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

王都には、決して触れてはならない裏の組織が存在する。

その名は、“紅の棘”。

侯爵令嬢シャルロット・フリューゲルはそんな組織を従える家に生まれた少女であり

親兄弟のすべてを踏みにじってその首領の座を奪い取った、この王都の巨悪であった。

小説家になろう様、カクヨム様、ノベルアップ+様、アルファポリス様にて同時投稿  
しています。

# 目次

- 1 巨悪令嬢シャルロツテ・フリユーゲル

## 巨悪令嬢シャルロット・フリーゲル

悪役令嬢というジャンルがある。

それは、前世の記憶などを得た“悪役令嬢として破滅する記憶”をもとに、幸せな暮らしを目指すようなジャンルだ。

もつとも、それはあくまで創作であり物語の事だ。現実にも前世の記憶などがあつたとしても、その道を歩むしかない者だっているのだ。私のように。

「首領、ご指示を」

「麻薬の管理は、変わらずロナートに任せるわ」

「……よろしいのですか？ あ奴は首領に従順というわけではありませんよ？」

「だからよ。ロナートを据えていればいざずれボロを出すわ。その時に肅清した方が効果は高いもの」

「その深謀遠慮、感服いたします」

「世辞は良いわ、邪魔よ」

「……ハッ」

そうして去っていく初老の男性。麻薬だの物騒なことを言っていたが、一応私の部下

だ。

このように、現在私は悪役令嬢をやっている。それもただの悪役令嬢ではない。王都の闇を一挙に引き受ける“紅の棘”、その“現”首領が私だ。

名を、“シャルロット・フリーユゲル”

歳は16、長身に赤紫の髪を短く切りそろえた、それなりに美人の少女だ。……と、自分は認識している。

前世では現代日本で普通に暮らしていたはずの一般男性に、悪役令嬢TS転生とかい  
い加減にしてほしいものだ。

おかげで今世での両親兄弟を皆殺しにする羽目になってしまったではないか。

日本人の感性を持つている私には、この“紅の棘”の私が首領になる以前の状態は少し見苦しかったのだ。

どうしていちいち殺しだの恐喝だので資金を稼いでいるのかがさっぱりわからない。もつと効率的かつ自主的に利益を差し出させるようにするので十分だろうに。

それに、犯罪行為をするのならもつと末端を簡単に切り捨てられるシステムにしないと厄介だろう。受け子という言葉しか知らなかったので適当に小分けにする仕組みを作ったくらいではないが、それでも情報化していない中世ファンタジーかぶれ社会ではなかなか有効なのだ。

「しかしトニー、どうして私は首領などという面倒な仕事をしているのだろうか」

「……シャルロット様が、そう望んだからでは？」

「……貴様も私を」そう」としか見ないか」

「シャルロット様？」

「茶番はよせ、トニーならば今の私の言葉に冗句の一つでも返してくるところだ。変装はそれなりだが、トニー自身の分析を怠ったな」

そんな言葉を聞いた瞬間に、突如として高まっていく魔力。彼の変装魔法が解かれ、即座に真空の刃の攻撃魔法が無詠唱で放たれる。

暗殺向きの良い魔法だ。その点だけ見ると悪くないが、この男は根本的に間違っている。

この私、悪役令嬢シャルロットの側に護衛が居ないのは。

この部屋がよその部屋から見られないような構造になっているのは。

この「紅の棘最強」の実力を、誰にも見せないためだった。

真空の刃をただ腕を振るだけでかき消し、無造作に放ったただの魔力の圧だけでその男を屈服させる。

ほんの少し力を見せたただけなのに、この暗殺者は戦意を喪失している。体の震えが止まっていない。

この程度の男に、私の暗殺を任せると随分と今回の敵の勢力は小さいようだ。

「さて、依頼者のことを話してくれるのならば私は君を殺してあげよう。そうでないのなら、少しばかり死ぬ方がマシな目にあつてもらうが構わないな？」

「な、なに言つてやがる！」

そうして始める、機械的な拷問。

指を一本一本削り落としていく古典的なモノだったが、これをするだけでどの暗殺者も雇い主を言うのだから面白いものだ。

この世界に拷問の文化はあまりないのだとか。人類の歴史とは殺人の歴史なのだからもう少しいろいろあつてもいいだろうに。おかげでこの部屋の拷問器具はほとんど自作なのだ。

などつまらないことを考えていると、いつも通りに暗殺者の顔は苦痛に歪み涙を流して声にならない声で“やめてくれ”と言おうとしているのが見えた。

「ローウエル、だ！ 俺を雇ったのは、フレディ・ローウエルだ！ だから早く、早く殺してくれ！」

「……話すのが早いですね」

「信じてくれよお！ 俺は女を殺すだけの簡単な仕事だつて話だつたんだ！ こんな、こんな地獄が待ってるなら、俺は受けなかつた！」

「……まあ、十中八九罨だろうがどうでもいいですか。今、楽にさせてあげます」

そんなわけで、虚属性魔法という私の固有魔法オリオジナルでこの世からこの男を消し飛ばす。それは文字通りの消滅であり、どこにも痕跡は残らない。これでまた、トニーという“架空の腹心”がこの世から消えることになった。

実のところ自分は死ぬことが楽になることだとは思えないのだが、それは置いておこう。

実際、死んでから生まれ変わるまでの苦しみは筆舌に尽くしがたかつたのだし。

「それでは、罨ごと潰しに行きましようか」

そう呟くとともに鳴らした呼び鈴。その音に引かれるように多くの紅の棘の暗殺者たちが傍らに現れる。虚属性魔法のちよつとした応用だつた。

そんな彼らと共に赴くのはもちろんローウエルの屋敷。私を殺せもしない程度の間を暗殺者に起用するなど許しては置けない。

無能が厄介なのは、敵でも味方でも同じなのだから。

この王都では、タブーとされている言葉がある。

それは“紅の棘”。

彼らは日常のどこにでも潜伏している。彼らは裏の世界のすべてを取り仕切っている。彼らは敵対する者に容赦はしない。そして、彼らに恭順するものには幸福が約束される。

そんな奇妙な噂だ。かつては誰もが知る邪悪の権化であった彼らだが、今ではそれほど否定的には見られていない。この王都の表側は、とても平穩になったからだ。

それは、シャルロツテの効率を求めたイメージ戦略の結果だが、それを知る者は少ない。せいぜいが代替わりしたことくらいだろう。

だが、たったそれだけでこの王都はガラリと変わった。光と闇の境界線がより深く、より大きくなった。

だからこそ、王都の裏で奴隷の密輸で儲けていたローウエルに連なるものが一夜のうちに皆殺しにされ、その利権を“紅の棘”が握ったことを表の人間は誰も気づかない。

そして、その奴隷の密輸がより密かなものになり、より多くの犠牲者が出るようになったことを表の人間は何も知らない。

そこにあるのは、自分のことを真の邪悪であると未だに気付いていないシャルロツテの思惑だけだった。

「とはいえ、表の顔はきちんとしなければ裏のことが隠せませんか」

そう呟くシャルロットの手元にあるのは、合格通知。

この王都、いやこの世界随一の学び舎である王立ダリアン学院。その試験の合格通知だった。

正直なところ、シャルロットは学校で学ぶことなど全て身に付けている。文字に計算に歴史に魔法はもうシャルロットの血肉と化している。

実利としては、せいぜいマナーをより洗練したものにできること程度だろう。

「しかし、合格するつもりはなかったのですがね……」

そんなことをつぶやいてから、手元の呼び鈴を鳴らしてこの家の使用人を呼ぶ。

彼女らの手によって着飾ることにより、“紅の棘”のシャルロットは“侯爵令嬢”のシャルロット・フリーゲルへと変心する。

それだけで彼女から出ていた邪悪のオーラは消え去り、少しきつめの令嬢になったのだ。

そうして、彼女は外に停められている馬車へと歩き出す。

王立学園での生活が、この世界の元になったゲームの話だとはシャルロットは知らない。

この世界が“紅の棘”への復讐を心に誓うヒロインと、その協力をする攻略対象の話だという事を彼女は知らない。

だがしかしその程度ならば問題はない。

復讐程度で命を取れるほど、このシャルロツテという女は甘くないのだから。

「では、学園生活を楽しみましようか」

そうして、“巨悪令嬢”シャルロツテ・フリーユージェルは舞台の上へと上がるのであった。